



「早春（水仙）」絵・文：白澤 恵舟

そろそろ雪も消えかかってくる頃、彼女は、どこやら待ち遠しいように黄金色の髪飾りをつけて、優雅な緑のスカートを微風に揺らす。もう、待望の春だ。桜の蕾もかなり膨らんで来たようだ。

## 郷土の先覚

会長 菅原 三朗

私の郷土、潟上市昭和（旧南秋田郡昭和町）には偉大な先覚が二人おり、その一人が農聖といわれた石川理紀之助翁（1845～1915年）である。

翁は、現在の秋田市金足小泉の奈良周喜治の三男として生まれ、21歳の時に現潟上市昭和豊川山田の石川長十郎に婿養子入りをしており、県の農業行政に従事し、米質改良指導、種子交換会（現在の県種苗交換会）の創設など、多くの業績を残した。二県八郡四十九カ町村の経済調査、土壌調査を行い、七百三十余冊からなる「適産調」を著したのは貴重な資料として、高く評価されている。

1月18日に招集された第169回通

常国会において、福田康夫総理大臣が施政方針演説で「農聖」石川理紀之助の言葉を引用し、粘り強く全力で国政に取り組む決意を述べられた。

どんな時にも決してあきらめることなく、結果を出すまで努力することの大切さを唱えた「井戸を掘るなら、水が湧くまで掘れ」や「何よりも得がたいのは信頼である。進歩とは厚い信頼でできた巣の中ですくすく育つのだ」と言う石川翁が残した言葉や文献を用い、「信頼という巣を、国民と行政・国民と政治の間につくりたい。私はどんな困難があろうとも、あきらめずに全力で結果を出す努力をしてまいります」と演説の最後を締めくくった。

常に地域に根ざした農業指導を行い、自ら貧農体験をすることで農民の信頼を得るなど、農村救済活動に生涯をかけた郷土の偉人石川理紀之助翁である。自ら進んで実践し、その中から生まれた言葉の数々や生き

方が、没後およそ百年経った今もなお私達の心に生き続け、国、そして私達の進むべき道を示してくれているかのようなのである。

翁はまた歌人としても優れた足跡を残している。常に何事にも率先垂範を旨とした指導者として、最も有名な歌は「寝ていて人を起こすこと勿れ」である。

私達は小学校（昭和13～18年）当時から、郷土の先覚として石川翁について学んだものであり、翁をたたえた唱歌は今でも記憶している。『夜半に起きいで業励み、道ゆくひまも文や歌、積める知徳の養いはやがて身を立て名を上げん。』

農家経済人の道、身に行いて世にさとし、村や民をば救いたる功は高し大老農。』

潟上市郷土文化保存伝習館（石川翁資料館）には石川翁の遺跡と遺書・遺稿、収集物のほか、教育にも力を入れた当時の資料が数多く展示されている。

地域再生と建設業の未来

# 2008新春講演会

2月5日、秋田ビューホテルにて、秋田県建設業協会、秋田県建設産業団体連合会、秋田県建設青年協議会の3団体の共催で「2008新春講演会」が開催され、会員ら90名余りが聴講。「地域再生と建設業の未来」と題し、本県在住の東京商工リサーチ顧問荒谷紘毅氏が講演。景気の実態・建設投資の推移等のデータをもとに講演、地方が担う役割と可能性の観点から将来に向けての対応を示した。

講演では始め、雇用・企業倒産の面からのいざなぎ景気(1965~70年)と平成景気(2002年~)対比、建設投資の推移を基に、建設産業の実態、地方では景気拡大が見られない現状について数字の裏付けがあること、かつてのいざなぎ景気では見られなかった現象があることを述べた。

また、日米構造改革から独占禁止法までの歴史的経緯を踏まえ、日本

経済における海外からの関与、建設業が外資との競争にさらされていく可能性、将来像に危惧を見せた。

終盤では、地方の存在意義と将来について、都市への人材と農林水産物の供給という役割、その対応として資源(ヒト・モノ・カネ)循環型構造の構築の必要性を説明。

リタイアした人間が住みづらい都市・住みやすい地方との視点から、地元如若者を留めるのではなく、一旦県外へ出てもらい、働き終えた後戻ってきてもらう。併せて、そうした人材を活用した地方の活性化など、積極的な人材の循環により、秋田自体をなんとかするのではなく、東京を助けて、その結果として人・金を地元に戻元するという考えを提示。その対応策として、帰郷者の受入環境、帰ってきたいと思わせる秋田の土壌作り。本県出身者をターゲットとしたものではなく、その配偶者等(県外出身者)のニーズを満たし、夫婦で帰郷しやすくする効果的な整備が必要であり、そこから仕事

も生まれてくるという視点が建設業に求められると述べた。

講師の荒谷氏は秋田県比内町(現・大館市)生まれ。秋田高校、早稲田大学を経て株式会社東京商工リサーチ入社。秋田支店長、盛岡支店長、東北地区管理部長兼東北支社長を経て2003年6月取締役情報出版本部長。2007年6月退任し顧問に就任。

著書として「やぶにらみ秋田経営風土記」、「おかめはちもく秋田経営風土記」(無明舎出版)「倒産しそうな会社が見る見るわかる」(共著・サンマーク出版)を上梓している。



# ワンデーレスポンス勉強会

秋田県建設青年協議会(平野久貴会長)は秋田県建設業協会、秋田県土木施工管理技士会、秋田県建設技術協議会との共催により、1月31日、秋田県JAビルにおいて「ワンデーレスポンス勉強会」を開催し、東北地方整備局発注工事に携わる企業の経営者や現場代理人、また、県内発注機関から関係者約170名が参加。

ワンデーレスポンスとは国土交通



省が工事監督業務のひとつとして、工事受注者からの質問・指示依頼に対し、出来る限り「その日のうち」に解決するよう努力する。また、その日のうちに解決できない場合でも、回答日を予告するなど、その後の段取りが出来るような何らかの回答を「その日のうち」にするという取組。

勉強会では始め、柴田久秋田河川国道事務所長が「公共工事の改革の一例-ワンデーレスポンス-」と題して、公共工事の動向、発注者側における取組、ワンデーレスポンスにより期待される工期短縮などの効果を示した。また、対象工事における監督職員からのアンケート結果を紹介。説明の終盤では、事務所毎に設けられて「工事執行相談室」を紹介。受注者の活用を求め、ワンデー

レスポンスに当たっては、一人ではなく、チームで実行することが求められることを述べた。

続いて、(株)ピーイング 取締役経営推進室長の岸良裕司氏が「三方良しの公共事業改革-利益を生み、人を育てる施工管理の実践」を演題に、クリティカルチェーン(CCPM)による工程管理と工期短縮の手法について講演。施工前の徹底的な打合せ・検討、各工程を圧縮することによる余裕を作り、それをプロジェクト全体で管理、工期短縮に繋げる手法について事例・具体例を示し説明した。

事例紹介では、野口建設(株)(宮城県栗原市)の野口典秀社長から、実際の工事においてCCPMを導入・活用し、工期短縮を実現した過程と、目的意識の明確化、社員間のコミュニケーション向上など、ワンデーレスポンス実施の成果を紹介した。

## 人材確保・育成協議会を開催 推進方針、実施計画などを承認

県協会では、平成20年2月21日（木）秋田ビューホテルにおいて、平成19年度秋田県建設産業人材確保・育成推進協議会（会長・川上洵秋田大学工学資源学部教授）を開催した。

協議会には、業界や行政機関、教育機関の代表者などを含めた11名が出席。

初めに、人材確保・育成推進協議会川上会長は、「建設業を取巻く環境は、耐震偽装問題等により建設に関する審査が厳格になったことによる住宅着工、大型物件の減少、公共事業の予算削減、アメリカ住宅の担保問題のサブプライムローン問題が日本の経済をゆるがす等、冷え切った状況が続いている。一方、新卒者の就職状況は、団塊世代の退職による新旧交代の要因もあってか就職氷河期を脱したように思われる。以上のような背景をもとに、現状報告と今後の課題や長期的な展望などのご意見をいただきたい」とあいさつ。

続いての協議では、雇用改善推進事業等の方針、実施計画について承認され、事務局は、今後の事業に反映していくこととした。

また、意見交換では、▽企業の新規学卒者採用を促進する評価制度の検討▽県内就職希望の新卒者、Aターン希望者に対する県の受け皿拡充対策▽資格試験受験者送迎に対する助成などについて出席者より意見が述べられた。



# 土木 建築の

# 近代化 遺産

No.66

## 森長旅館

男鹿市船川港船川字栄町



男鹿半島の行政、商業の中心地である船川港は古くから日本海航路の寄港地として栄えた。明治期、近代港湾として一大築港がなされ、大正三年からの第二期工事を経て昭和五年頃には文字どおり近代港としての体裁を整えた。この築港最盛期に石川県から移住した先々代が元浜で旅館業を始め、その後、昭和九年、現在地に洋風のハイカラな旅館を建築したものと見られる。本館は木造二階建てで、RC造りのように見えるが外壁をリシン壁とした頑丈な木造建築である。

正面には起こり屋根形式、半円形の玄関ポーチを配し、妻飾りに蝶か、あるいは蝙蝠と思われるレリーフ意匠がある。玄関柱の上部の柱飾りや建物本体の開口部の木製上げ下げ窓、壁面上部に施された軒蛇腹文様が目を引く。一方、内部は階段部分を除いて純和風で洋風外観との対比が興味深い。

本館正面から逆シ方向につながら「離れ」は近隣で起きた火災の延焼のあ

と昭和二四年頃に建てられたもの。木造二階建てで和風の数寄屋造りを趣となつてゐる。本館と離れに囲まれた中庭も小規模ながらまた見るべきものがある。

さらに敷地の東端に位置する切妻造り、平入り、鉄板葺き（元は瓦葺き）の土蔵は昭和初期の建築とされ、男鹿石の土台と白黒の漆喰壁、方杖の使用など秋田の土蔵建築の様式そのものである。

本館の建築概要は、木造二階建て、寄棟造り、鉄板葺き、および背面木造二階建て、切妻造り、鉄板葺き、建築面積は二三七㎡で、離れの方は、木造二階建て、寄棟造り、鉄板葺き、面積七九・四五㎡となつてゐる。

本館、離れ、土蔵の三建築は平成一七年二月二八日に国登録有形文化財に指定されている。旅館は平成一八年に営業を取りやめてゐる。

（取材・構成／藤原優太郎）

## 情報コラム Vol.19

### 秋田県 総合評価落札方式 運用ガイドライン改訂版示される

秋田県における総合評価方式は、平成17年12月にガイドラインを策定して以降、平成18年度66件、平成19年度は80件を超える事業について摘要がなされております。これまでの取り組み実績を踏まえより効果的で分かりやすい評価を行うために、このたび、見直しが行われました。

○主な改正点

1. 評価手法の変更「除算方式」→「加算方式」
2. 簡易型（実績確認タイプ）の価格以外の評価点アップと評価項目の追加
3. 施工計画確認タイプの新たな評価項目の追加
4. 標準型の評価項目及び評価基準の明確化
5. ペナルティ

評価項目に継続学習「CPD」が追加され、（社）全国土木施工管理技士会連合会によるCPDS（継続学習制度）の単位も評価の対象となりました。

- ・継続教育（推奨単位以上取得）の証明有り 1点
- ・継続教育（推奨単位の1/2以上取得）の証明有り 0.5点

詳細は以下アドレスのホームページをご参照下さい。

秋田県一総合評価落札方式運用ガイドライン（第2回改訂版）  
<http://www.pref.akita.lg.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1144652088227&SiteID=0>

（社）全国土木施工管理技士会連合会－CPDS  
<http://www.ejcm.or.jp/index2.html>

なお、本会では秋田県との共催で「総合評価落札方式ガイドライン（第2回改訂版）説明会を2月21日に開催することとしておりますので、ぜひご参加下さい。（受付システムへ）

コマーシャル コマーシャル  
**CM・CM**

菅 禮子  
 (作家)

次々に現れては消えるテレビの映像…その中でも、広告メッセージ！その中でいつまでも記憶に残るものは、果たしてどれだけあるだろう。

以前にも書いたと思うが、もう何十年も前にテレビ映像に紹介されたCM。

どこまーでも行こう 道は遠くとも  
 口笛を吹きながら どこまでも行こう

ブリジストンタイヤだっけ？タイヤが一つ、はらかな山や坂道を転がって行く絵が、そのメロディと共に、ほろぼろとして、明るく楽しく、山坂を人生に置き替えて心を奮立たせてくれるような印象で、未だに私の胸の中に生きつづけている。

今はどうだろう？コマーシャルメッセージ即ちCMもエロ、グロ、ナンセンス時代と言うと、いささか古い言いまわしかもしれないが、なんともグロテスクとしか言いようのないCM…受験生のための塾の宣伝なのか…男性の顔や頭を黒い線で塗りつぶして行く…！いったいどんな狙いなのか？ゾッとせずにはおられない。

映像を創る側にばかりイチャモンをつけているようだが、かく言う私も決して良い視聴者とは言えない。

「あちらにもキレジ こちらにもキレジ」

昔から、仕事をしながら、観たり、聴いたり、いや、聴いたり観たりながら族—その日も机に向かっているとアチラニモキレジ コチラニモキレジ というナレーションが耳に入って来た。

えエッ なんだって？そんなにこの国には切れ痔の人が多いのか…さてはぬり薬のCMだなー

そう思いつつ顔を上げて画面を観ると、そこに映っていたのは、家々の屋根に林立するUHFのアンテナ…つまりデジタル波を地上で受信する新しい放送形態「地デジ」のCMだったのだ。

一年だよ、耳が遠くなってるんだろ！—そう言われればそうかもしれない。でも、画面は見ずに聴いてごらんさい。「キレジ」って聴こえるから—

だいたい紛らわしい言葉を使うなって！

また、ある日、例によって仕事中、耳に入って来たCMのナレーション…

「クモハ、カンガエルカオヲモツテイル」

—いいねエ、いい詩だ— 顔を上げて窓外に広がる空を見た。おあつらえむきの雲が、緑濃い峰々のかなたの空に、白銀に輝きながら浮かんでいる。細めた瞳をテレビの画面に転じると、映っているのは、机上に拵けた問題に取り組んでいる子供たちの真剣な表情…「公文塾」のCMだった。

ワンちゃんが父親？

画面にお出ましのワンちゃんは「ワン！」と吠えて、時に物事のすじを通し、有り難き教訓をたれ賜う。「少年よ、大志を抱け」「ケンカをするな」かつてはあったけれど、今はほとんど喪われている家長としての父親の威厳を示している。母親がワンちゃんに「あなた！」と呼びかける。するとこの息子や娘どもはワンちゃんの子？ギョ！たしかにそういうことにはなるが…しかし、単なるナンセンスとも言いがたい。いやらしくない。むしろ愉快である。では作者はなにを意図しているのか？

親父や老人が口にしても「古くさい」「ダサイ！」と若者が反発する教訓も、このワンちゃんが言うと案外、おもしろさというか、奇想天外さで、すんなり心に受け入れられるのではないか？鬼面ではなく、犬面人を驚かすである。ついでだから、言わせてもらう。某局の女子アナが「すごい美しい！」と言っているのを聴いた。“すごい”というのは形容詞で、く（連用）い（終止）い（連体）けれ（假定）と活用する。“美しい”という言葉は同じ形容詞で用言であるから連用（用言は活用する）形で、ほんとうは「すごく美しい」というのが文法上の正しい使い方ではなからうか。あえて用いるとすれば、すごい！で切って（終止）とても美しい（終止）と言うべき…

この使い方をするのはどうも女性が多い。男性がこういう使い方をするのは聞いたことがない。

しかし、この使い方はすでに社会通用語として、市民権を得ているのだろうか？それにしても、未熟な女子高校生ならともかく公共放送の女子アナが平然と使っているのはいかがなものか…そうだ！ワンちゃんパパに言ってもらおう。

「お前ら！正しい言葉づかいをせよ！ワン！」と。